

平成 26 年 8 月豪雨災害 丹波市職員 インタビュー

日時：平成 27 年 8 月 10 日

本部員 A の 16 日～17 日避難勧告の発令に至るまでの状況

【本部員 A】 当日の思いとすれば、確かに警報は発表されていましたが、そんなにひどくなるというイメージは持っていませんでした。警報発表と同時に、防災の担当職員は自動的に事務所に参集するという形をとっていましたので、自宅から慌てて事務所に向かいました。そして 16 日の午後 4 時前ぐらいに到着しました。それ以降、一旦、大雨警報は解除され、注意報に変わったこともあったんですが…。

神戸地方気象台の防災気象官とは、些細なことでも助言や情報提供をいただくためにいつも連絡をとるようにしています。これは昨年の 6 月に大粒の雹（ひょう）が丹波市に降ったことがあり、その際に気象台の調査班が丹波市に入られたときから気安くお話をいただくようになり、いつもその方を頼って気象台に連絡するようになりました。特に今後の気象予測等を確認したいときなど…。当日も私は警戒本部や対策本部の会議前には必ず気象台に確認をして、現状と今後の予測を会議の場で知らせるという役目を持っていました。気象台の方も、最初の頃は「日が変わらないうちに警報もなんとか解除できるでしょう」というような感じでしたので、私たちもあれほど大きな災害になるという予測は全くしていなかったというのが、本当のところでした。

夜 21 時、22 時を越え出してから雨が強くなってきました。気象台からも、「その日のうちにはちょっと帰れないかもしれませんねえ、警報も翌日まで延びる可能性もあります」というお話を聞き、予測が以前よりは少しひどくなった程度でしか思っていないでした。

ただ、丹波市は広い面積を有しているので、ここ（本庁舎の周辺）とそれぞれの地域によって気象の状況や降雨量も、ぜんぜん違うという状況があります。この中（本庁舎）でテレビのニュースやインターネットを通じて、いろんな気象情報や今後の見込みなどを把握していましたが、その時点でも、まだあれだけひどい被害になるという見込みではありませんでした。ここ（本庁舎周辺）の上空を見る限り、そんなにひどい雨の状態ではないという認識でしたが、結果的には、市島地域とは全く異なった状況でしたが…。

市島地域とは、ここから道のりで 14km、直線で 10km もない所なんです。雷もひどくて雨の量も極端にすごかったと聞いています。おそらく災害対策本部側と支部側とは切迫感にかなりの温度差があったと思っています。市島支所長（災害対策支部長）からは、「早く避難勧告を」という話もあったんですが、実際に本部側の者がそれだけの危機感を持っていたかということ…。意識としても、かなりの温度差があったんだと、私自身思っています。

土砂災害警戒情報は、夜中 0 時 20 分に発表となったんですけど、それまでに市島地域においては相当道路冠水もしていたでしょうし、雨の量も相当すごかったようなんですけど、

こちら（本部）では、そこまでの情報を把握していなくて、土砂災害の警戒情報の発表を受けて、「早く避難勧告を出してくれ」という現場サイドでの支部長と、本部側での意識に相当のずれがありました。実際に 0 時 20 分に土砂災害警戒情報が発表されてから、避難勧告の発令に至ったのは 2 時です。その間何をしていたかいうと、「早く出してくれ、早く出してくれ」という中で、できるだけ場所を特定したいという思いがあったので、ひとつの町域の全部に出すのか、もしくはもっと場所を絞った形として小学校区単位とするのか、その辺りの場所特定を土砂災害のメッシュ情報に基づいて確認をしていました。そういう作業が結果的に時間を経過させてしまって、避難勧告を発令するまでに相当の時間（1 時間 40 分）がかかってしまったと思っています。後で、市島支部長からは、「避難勧告が発令されるまでの時間がものすごく長く感じた」と言われたんですが、こちらはもうバタバタ状態で、あつという間でした。できるだけ早く場所の特定をしたかったんですが、時間がかかってしまいました。

結果的には、本当にひどい状態であった現場側と本部側とでかなり感覚のずれがあったということと、大きな災害であればあるほど現場からの情報っていうのが入ってこないということです。実際のところ、私たち災害対策本部側では、朝になるまであのような状態に至ったという現実を把握できないでいたんですから…。本部会議の場においても、これはたいへんなことになるぞという危機感や切迫感、現場の臨場感というのは、同調できていなかった部分があったと思います。

市島支所長の 16 日～17 日避難勧告の発令に至るまでの状況

【市島支所長】 その日は朝からちょっと気持ち悪い天気で、雷も随分と鳴ってましたし、その割には雨が降らないなと思って、一度午前中に職場に行って、各小学校区の雨量を確認しましたけれど、やはり 10 ミリ程度しか降っていないので、あんまり降ってないなあという感じで自宅に帰ったんです。15 時 35 分に浸水害の大雨警報が出たんですけど、自宅は、降ってないし、おかしいなあと思いながら雨雲の情報をみていました。自宅で雨雲のレーダーをずっと監視していたんですが、消えるはずなのに消えない雲の状態がわかりました。予測では消えるはずなんですけど、ぜんぜん雨が止まないの、なんかおかしいなあという感じで。

18 時くらいに職場に行って、各小学校の雨量計を覗いてみました。その時点ではまだ河川も増水してませんし、上流域でも雨が降ってませんでした。19 時に警戒本部が設置されてから、ちょっとした現象が起き出した。水路が溢れているとか、裏山もちょっとおかしいとか、そんな情報が入ってきまして、地域の情報が欲しいと思い、急きょ支部職員には 1 号配備をかけて消防団にも召集をかけました。その後、警戒本部の会議があり、雨はだいたい 17 日になったら止むだろうという情報をいただいたので、我々も 2 号配備をしながら避難所の開設準備をしてたんですが、雨がいったん小康状態というか、ゆるくなった。ああ止むんだなという感じを受けたんです。17 日の午前 0 時 20 分に警戒情報が出ましたが、そのときはまだ私も、現場状況としてはそんなたいしたことないと思っていました。

その後、午前1時ごろから、土嚢積みで、だいたい消防団が頑張って防御活動をするのですけれど、押されだしたんです。積み土嚢では対処できない水量になってきたなとわかって、急きょ、そこから逃げて（避難して）いただく方針に変えました。そこから本部会議中に、避難情報をお願いして、避難所を開設しました。そのときはまだ水平避難は可能だったと思うんです。情報によると冠水地域はありましたが、避難経路が開いていたので、避難所にはまだ行ける状態だと思ったんです。ですが、1時30分にはちょっと危ないなあという状況になり、それから15分後には「早く避難勧告を出してくれ！」って。そのときはもう、横は絶対無理だなと。自宅の高い位置とかに行ってもらうしかないなという状況で、右往左往してました。その後（美和地区の避難勧告を発令してから）はあまり覚えてません……。というのは、避難勧告発令後は「どうしたらいいんや、どこに逃げたらいいんや」という問い合わせばかりに対応していました。それから消防団員にも安全確保をしていただかないといけないということで様子を見たり、帰ってこない職員がいたのでその安全を確認したりで、時間はあっという間に過ぎていった感じですね。

地域の方が避難勧告の放送を聞いて自治会長さんや自治会役員の方などが自主的に出てくれて、避難行動の呼び掛けや安否確認をしてくれた。また、前兆現象で、音がするなあとか、においがするなあということで、逃げていただけていました。だいぶん地域のみなさんも土砂災害には警戒心を持っていたんだと思います。自治会ごとに、災害発生の数年前に地域のみなさんで防災マップ作りをされていたので、とりわけそういう形がとれたのだろうと。夜中のことで、避難情報は出しにくかったと思いますが、出したことできっかけを与えたんだろうと思っています。

ちょっとしんどかったですわ、私は。夜ですので、情報は入れてくれるんですけどやっぱり様子が見えにくかった。全体の把握がしづらいなあと。夜中の1時ごろからは完全に体制を変えて、全域を見させていたんですが、徐々に被害情報が多いところに寄せていって。にもかかわらず、いちばん被害が大きかった前山（さきやま）の情報がなかなか入ってこなかった。それで、災害の状況がどんな感じかなあというイメージがしづらかったんです。消防団員から私の携帯に直接情報を入れてくれたりして、そこら辺の情報でなんとか把握できました。こりゃ避難させなあかんなあ。やっぱり夜で見にくいのと、被害が大きいとそちらばかりに対応するため、情報を出しにくいんかなあ。情報が入ってこないところはまずいのだろうという判断で、避難所を開設したり、避難勧告を出す地域にしてくれと要請したりと。被害が薄いところはてきぱきてきぱきと見てくれるので、その差が出ました。あとは住民の皆さんの通報で、だいたいこういう様子かなあと把握しました。

水平避難があかんと思ったのは、道路と河川ですね。当初そんなに増水してなかったので、冠水というのがなかったんですけど、午前1時ぐらいから一気に増水が激しくなりました。避難所へ行かせ職員からは、浸水しているとか、危ないとかいう情報をくれたので、水平避難はちょっと控えたほうがいいだろうという判断になりました。私は、ドーンと流れているイメ

ーじやったので、ああ水平はちょっとやっぱ無理やったなあと。2 時ごろには職員からは大体、水平はあかんでとか、危ないですよという情報は増えてましたね。

避難勧告等の判断について

【本部員 A】 平成 23 年の台風 12 号でも土砂災害警戒情報が発表されたこともありましたが、当時から市町単位にしか出ないという意識があったので、それが出たとしてもどこが危険な状態かどうかなんて分からない。土砂災害警戒情報が発表されたとしても、それがイコール避難勧告につなげるという考え方は、その頃はなかったんです。今回、土砂災害の危険度を示すメッシュ情報を確認したんですが、早くどこかを特定しなければいけないという意識ばかりが働いていた。

丹波市のルールという訳ではないんですが、市長の考え方として、「基本的には夜中の水平避難はさせるな、できるだけ明るく雨がひどくならない間に避難準備情報を発令して、避難所を開けて、できるだけ早い時期に避難してもらえ」というのがあったんです。ただし、今回の災害は、前半はあまりひどくなるという意識がなかったのに加えて、土砂災害というのはまったく頭になかった。結果、明るい間に避難準備情報の発令というのは当然ながら出す予定（検討）はまったくなくて、そのまま推移していったというところでした。

警戒本部を立ち上げたのが 21 時ですので、市長の考え方から時間的に避難準備のタイミングではないと思っていた。となると後はもう避難勧告をいつのタイミングでどこに対して出すかということ、そこにしか意識はなかった。23 時 10 分に警戒本部会議があって、0 時 20 分に土砂災害警戒情報が発表されて、災害対策本部が 1 時 15 分に設置されて、実際に避難勧告を出したのが 2 時です。0 時 20 分のときには場所の特定まではできておらず、現場の市島支部長から「早く避難勧告を出してくれ」という要請を受けたことで、慌ててメッシュ情報を確認しました。今居る場所が災害対策本部の会議室なんですけど、ここでメッシュ情報を本部員 B と一緒に確認しました。

実は私は、今回いちばん被害がひどかった市島地域の出身なんです。メッシュ情報で 5 キロの枠を見たときに、どこと、どこと、どこという感覚も、地図で把握できたので、市島支部長と話をしながら場所の特定を進めていった。避難所は、当時は早くから開設の段取りはしていたという話なんですけど、水平方向への避難は無理だという情報は支部長から入っていた。しかし、こちらではそれだけ切迫した状態だという意識もなく、たとえば道路がこんなぐらいいま冠水しているとかそんな情報はまったく無かったので、支部長からの情報だけをもとに避難勧告を出したのが実際のところでした。

この時、すでに本部会議が終了した後だったので慌てました。市島支部長からの情報のみを基に、「市島から避難勧告の要請です」ということを上司に伝え、本部長である市長に対して、避難勧告発令の判断について市長室に伺いに行ってもらい、それで「出せ」という命令を受けて、避難勧告の放送を私が生放送でしました。

本部会議が 1 時ですので、その際、土砂災害警戒情報が出てはいるものの、私自身が会議の中で避難勧告の発令の検討（発令時期や場所など）は行っていないという認識を持ってい

ました。しかし、後で確認すると市島支部長は、会議の中では既に「避難勧告を出しけれ」という要請はしていたというのですが、ここで認識のずれがあり、この1時の本部会議終了後においても避難勧告を発令しなければならないという切迫感を持たないまま本部要員は散会となったんです。

その後、1時30分頃に本部室と支部とをつなぐホットラインを通じて、市島支部長から「もう危険だ。早く出してくれ」という連絡を受けて、慌てて場所の特定に入った。

今考えてみると、土砂災害警戒情報の発表（0時20分）から避難勧告の発令（2時00分）に至る間に本部会議（1時00分～1時20分頃まで）があったんですが、そこで避難勧告の発令決定までは至っていないので、実際は10分、15分くらいの間で避難勧告の場所特定と放送原稿の作成、本部長の決定までを行ったことになります。

避難勧告の場所特定は、結局、広い意味での5キロメッシュの赤い表示がついているところへという認識でした。最初の2時に出したのが、竹田、前山、吉見地区。これは市島支部長とも調整して。続いて美和地区に出すのは、現場側と調整してという形にはなるんですけど。ただしこの後、氷上町の一つの小学校区に対しても避難勧告を出しているんですが、それはあくまで河川の水位上昇に伴う避難勧告です。

結果的には、春日町の一部と氷上町の避難勧告を発令した小学校区と違う小学校区の一部で、市島町と同じような被害が実際には起こっていましたが、そこに対しての避難勧告を出せていなかった。それが結局、5キロメッシュで大きな枠取りでのところしか見れていなかったのがその原因の一つではないかと思っています。当時、避難勧告の判断は、5キロメッシュの情報をメインにしていました。もっと細かい1kmの情報までは確認していませんでした。現在では、丹波市も10mメッシュの箇所別土砂災害危険度予測システムを導入していますが、当時はまだ入っていませんでしたし、細かい情報は把握できていなかった。

市島支部からはいろんな情報が支部長から入ってきたので、その地域に対しては、避難勧告の発令ということに至りましたが、同じような被害が発生した氷上と春日地域からは全く被害情報が入っていなかった。このことがこの地域に対して避難勧告の発令に至らなかった要因の一つと認識しています。

— 本日はここまで —

早く読み終えた方は、先に読み進めてください。

災害対策本部と市島支所の温度差

【本部員 B】 午前 1 時 15 分に警戒本部から対策本部に切り替えました。切り替えを決めたのは 15 分ぐらいの短い警戒本部の会議だったんですが、市島支所長から本部員 A さんにいろいろな情報が行ったかもしれないんですけど、対策本部全体は、緊迫感はまったくなかったです。

午前 0 時 20 分に土砂災害警戒情報が発表されて、はじめて 5 km メッシュのメッシュ情報を確認した。防災担当でないとわからないパスワードを入れたら、ほんとは 1 km メッシュが見れるんですけど、それを見ずに 5 km メッシュの方を見ていました。パソコンで画面を映し出したときに、市島の前山あたりに赤い枠が発生しとるというのは確認しました。

さっきも言いましたけれども、その段階でも、今まで土砂災害警戒情報が出てても被害はなかったというのがあって、市島支所長からいろいろと情報が入っていたという話ですけど、本部員の間では、また出とるだけやろぐらいにしか思ってませんでしたし、そんなに緊迫感もありませんでした。15 分間の本部会議の中でも、いちばん下流域の山南地域なんかでは雨は小康状態で、極端に言うとも山南だけはこのままの警戒体制だけで十分ですよという報告があったり、市島については、2 号配備してますよ、市ノ貝川では床下浸水が発生してる、竹田コミュニティセンターを避難所にしてほしいというのがありましたし。

教育部長の方からは、学校を避難所として使うのであれば校長先生を呼ぶので連絡をくれと。それと竹田コミュニティセンターについては停電なんで竹田小学校を避難所にするよう準備情報を流してくれというのがあって、地域で温度差があるというのが正直なところでした。

この時点でも、消防本部からの情報によると、前山ともうひとつ違うところに美和という地区があるのですけれど、そこのキャンプ場で河川が氾濫しそうやという情報があるよというふうな程度で。のちのちは自衛隊に出いていただいてという話になるのですが、その段階ではまだ本部員としてそんなに緊迫感はない状態でした。情報も入ってきてなかったというのはあるんですけど。市島の支所長の思いとこちらに詰めている者とぜんぜん温度差があったなと。今もそう思いますし、当時もそうでした。

【市島支所長】 実際、我々も支部で館の中に入っていて、外からの職員や消防団の情報を集めて予測するしかないんですが、1 時の段階ではたぶんまだ大丈夫やな、という感覚を持っていたと思います。会議中に「おかしいぞ」と思い始め、それでも避難情報の発信を要請することを判断しました。まだたぶん水平避難は大丈夫やろうなという認識があったので、避難情報を出してもらったら有難いなあというレベルです。それから 15 分ごとに、刻々と状況が変わっていった。あつというまに、2 時半から 3 時にかけてすごい状態になった。我々も情報の集め方が下手なんかわかりませんが、うまく判断できるような良い話をしてくれない。職員は淡々と報告するもので、臨場感がわからないんですよね。それに比べて消防団員は臨場感があって、「危ない！」ってわかるんです。職員は、正確に伝えてくれるんですが、ちょっと臨場感に欠ける。消防団の無線を聞いとるとちょっと怖いなという感じで、どちらかというと消防団のほうに耳を傾けながら、現場の状況を推測しました。

【本部員 A】 丹波市の特徴的なところとして、市域が広いので、災害対策本部と支部とい

う形をとっています。支部に配備する職員は、旧町の出身職員がそれに当たりますので、地元の地理状況とかがある程度把握している職員が支部にいます。ですので、市島支部長がある程度その地域からの情報に基づいて予測するという話を言っていました、多分あそこらへんがどうこうというのも、ある程度地元の職員が支所にいるからできたのかもしれませんが。

ただし、次第に旧町域ごとの職員の数のバラつきが大きくなってきていますし、よく知っている職員や上の年代の職員は当然少なくなってきているということもあって、地元をよく知っている職員を充てるというの、もう限界に近い状態になっています。

【市島支所長】 現場としても、常に警戒して見て回るところはだいたい回ってどんな状況かとか、そこから危ないよとかね、日常的に言ってますんで、だいたい見てくれているんです。が、予測をしていなかったところがけっこう被害ができたので、ちょっとおかしいぞ、ただごとではなくなるかもしれんなあと思ったのが、1時30分とか、そういう時間帯でした。初めは常に見ている場所に被害が出てましたので、いつもの調子かなと思ってたんですけど、1時30分ごろからはちょっと違うぞと。まず、これまでそこは溢水したことがないんじゃないかというようところが溢水してましたし、冠水状況もひどい。本来の雨ではないという感じがしました。

【本部員 A】 結局、地理や地形がわかっていなければ、ある程度の予測をしていますが、いつもと違った状況が起こったとしても、おかしいぞという感覚には至らないと思うんです。これからは本当に厳しい時代に入ってくると思うのは、地元の地理地形、そこに起こり得る災害をよく知っている職員が退職するとなると、様々な状況も全然わからない中で、こういう判断をしていかなければならないというのが、本当に難しくなるなと思いますね。

【市島支所長】 後から聞いたら、土のにおいがしたとか、木がミシミシしたとか、そういう情報がやっぱりあったみたいで。そういう情報が欲しかったなあと。後に「なっとったわ、そういいえば」という情報ばかりで。それが欲しかったなあとという思いはありますね。あったらまたちょっと動き方も変わったんでしょうけども。市民の皆様からは「水が冠水しとるから動けへん」とかそういうふうな情報ばかりでしたので。

どうやって地域に情報を取りに行くかですね。マッチングできたらいちばんいいんですけど、どうやって情報をとって、どうやって情報を流せるか、私らがそれをちゃんと増幅して、人に伝えられるかというのが問題やと思うんです。なんとなく、情報が静かに入ってきて静かに抜けてしまうので、そのへんは難しい。現実にはたくさん情報をいただくのでそれをしっかり見極める必要があるでしょうし、それをまた本部とかに流せるようにしないと。まずは人の命を守らないと、そこに責任持てるかどうかやと思います。

第一回災害対策本部会議時の被害状況の認識

【本部員 B】 実は、第一回の災害対策本部会議というのは、17日の4時くらいから10分か15分ぐらいだけやっとなるんですけど、そのときには、山南、一番下流域のところは、雨も小康状態で河川の水位も下がってますよという状況で、全然被害もない。本来ですと、今までようあるのは、一番上流域の青垣という地域で雨が降ると、加古川本川の水位が上昇して、

16 年の 23 号台風のような形でずっと下流域に大きい影響を及ぼしたというのがあって、そういうイメージがあるのですけど。氷上の地域も、一部住宅街が浸水してきたとか、春日でも被害が出ておるとかというような情報が入ってきたという、4 時の段階では相当ひどい状況というのはありましたので、この時点ではここにおります部長連中も相当ひどい被害であるという認識はありました。

地域の自治会長や消防等の対応

【本部員 B】 この時点で市全体的に 3 号配備をかけたんですけど、実際にはそれぞれ夜中ですので、自宅からそれぞれの支部とかこの本部に来るに來られない状態。朝まで最終的には自宅待機をした職員もたくさんおったと聞いてます。そういう意味では、きちっと情報が早いうちからつかめてなかったのと、予想ですけど 3 時ごろに発災してますけど、そのあたりには集中的に雨が降ったのだと。それまでの状況でいくと、丹波市のすぐ南に西脇市というのがあるのですけど、西脇市と多可町の間あたりの山からもう雲が湧いて出る状態でいつまでたっても雲が消えへん。赤い雲がずーっとこの丹波から福知山にかけて停滞しとる状況やいうのは、その時点より前から、雨の状況というか気象庁のデータを見ながら、いつまでたっても消えへんという状況でありました。

夜中であつたりしてしますので、なかなか情報が入ってきませんでしたけど、今お聞きいただいたように、行政側の対応というのは非常にたぶん、正直ぬるい状態やと思うのですが、実際被害の一番大きかった市島地域の前山地域の方については、それより以前から、あるいは 16 日の夜から、地域の自治会長が、地域の代表の方やとか消防が事前に見て回ったりとかいうのがあって、だいぶ啓発に回っていただいております。そういう意味では、旧町の時代から自治会の組織がしっかりしとる地域で、そこのトップを中心に、自分だけでは回れへんときにはその副の代表の方を通じて声掛けに回られたりとか、実際に各方に回って、「通常と違うので」言うて、全部声掛けをしていただいております。こちらが放送するより以前から、地域内ではそれぞれ回っていただいていたというのがありました。そういう意味では、行政の対応はぬるい状態でしたけど、地域の結束力というのか防災力というのか、つながりが強い地域で発災したので、これぐらいの対応で済んだのではないかなと。それは警報が出た午前 0 時 20 分から 3 時ごろまでの間に時間が相当あったので幸いだけで、もし広島のように警報が出てすぐに発災しておれば、丹波市も同じような状況で、あとは広島市でもすぐに、市役所の方が頭を下げてテレビの報道をされていましたが、ああいう状況になったのであろうなというふうには思っています。

【本部員 A】 地域の、大きな被害が出たところの自治会がしっかり避難誘導を、被害が起こる前にしていただいた。ということなんですが、話を聞いてみると、結構、危ない時間帯に避難誘導をされたところもあるようです。道路はおもいきり冠水して、玄関前には出られず、そして裏の窓から出て、みんなで手つないででないと進めないという避難をされたところもあったように聞きます。

一歩間違えたら、可能性としてあと何人かはお亡くなりになられていたかもしれません。

でも結果的には、大きな土砂災害が起こる前には、なんとか避難誘導ができたことに違いはありませんが…。

この地域は、どこが土砂崩れ起こりやすいところかという地図の作成を、市と一緒に2年前にしたところでした。自治会長さんに聞くと、「地図を作っというよかったわ」と。「やっぱりずれると思っていた同じところがずれよったし」。と言われていました。

今回その箇所以外にもたくさん、違うところがずれたところもありましたが、やはり想定していたところは大きくずれていた。だから大きくずれるところを事前に把握できていたので、警戒すべき箇所にお住まいの方に対して地域で早めの声掛けができたんだらうと思います。

でも、自治会の役員さんも2年に1回、或いは1年に1回交代されます。今回、たまたまその時の自治会長というか地域のリーダーが、防災を含めて意識が高い優れたリーダーだったからかもしれません。今後、そのリーダーが変わって、同じようなことができる方がリーダーになれるかどうかわかりません。そういう意味では、市は、地域の役員さんに対して普段から地域のリーダーとしてどうすべきなのかというのを説明しておき、きっちりと認識をしていただいて、自分たちのこととして考えてもらえるようにできないものかといつも思っているのですが、なかなか難しいですね。

行政の役目

【本部員 A】 我々行政ができることはと言えば、適切な時期に適切な情報をしっかり市民に伝達していくこと。丹波市の場合、防災行政無線の戸別受信機が各家庭に無償で1台配置してあります。屋外の拡声子局（屋外スピーカー）は大雨等の場合は全くと言ってよいほど聞こえませんが、雨音で家の中に設置されてある戸別受信機でも聞こえにくい状況があるかもしれませんが、台風や大雨のときには防災行政無線の放送は聞かなければいけないという意識は持っていていただいていると思っています。被災された地域の方に聞くと、放送で「2階に避難するように」と言うから、とりあえず上がってこかと言って2階に上がったら、その後1階に土石流が入ってきて、助かったわという話も聞いたりします。そういう意味では戸別受信機が各家庭に設置していたことは大きなポイントでした。

＜その他よかったこと等＞

自治会長とのコミュニケーション

【市島支所長】 自治会長と携帯電話のやりとりは、けっこう有効です。通常から、電話番号を交換しとくと、ダイレクトに「おまえもう出さなあかんのやないのか」と出てくるし。いつでもかけられる状態に。発災以降は、1週間後、2週間後もまた違う。ピンポイントで聞ける。「あんたどこ、今、状態どうや？」って。「溢れよって、危ないですよ」とかそういう声が聞けて、たいへん助かりました。やっぱり職員数も少なく、全部できませんので、自治会長とのつながり、ネットワークをつくっておくというのはたいへん重要です。無理も言われますけど、無理も言えるという関係をつくっておく。そこでやっ共助と公助の関係が

つながっていくのかなあ。だいぶん自助・共助に頼つとるところがあるんで。

平常時からの職員の防災意識と備えの大切さ

【本部員 B】 災害対策本部の本部員として何が大事なんや言うたら、状況がわかって4時以降、今後どうしていくんだという話になるんですけど。

いろんな情報が入ってきて、次何をしなくてはならないかということを考えないかんのが、部長の人間の仕事で、うちの部はこういうことをせんなんという意識がないといかんのでしょうが。悪いけどこの災害があって初めて分かったのですが、地域防災計画を見た人がほとんどいないんです。そういう意味では、ええきっかけにはなったかもしれない。こんなところにこんな部や班があるのはおかしいんじゃないかというのが初めてわかったり。そういうレベルなんです。

よく言われるのは、罹災証明を出して次の災害が起きたときに、災害に対してどういう行政からの支援ができるのか、それを早めに、たとえば自治会長さんとか地域を代表する人に配って安心感を与えとかというのも早めにしないといけないし、実際に予算もとっていかないと。今回はボランティア関係は社会福祉協議会に全部丸投げしてしまいましたんで、随分と怒られてるんです。なんでもかんでも降ってきたけど、打ち合わせもできてないのに、ボランティアの関係はおまえのところでせえよという格好で言ってしまつて。うちのトップはそういうふうな考え方でおりましたんで。向こうは向こうの思いがあるんですけど、少し温度差があつて、非常にご迷惑をかけたつていうのがあります。そこらへん整理せないかんというふうに思います。

災害対応の記録

【本部員 B】 記録を正直、きちんとしたものを残してないんです。今、音声だけにしろ、ビデオにしろ、今後は災害があつた時には、せめて文章起こさんでもあとで起こせるように、その記録だけは取ろうかと。そやないと、あとでたとえば講演に來いとか説明に來いとか、結構あるんですね。思とる範囲のことは言えても、きちっと時系列で整理したものがあるんかというたら無いんです。他の市からも助言はいただきましたけど、やっぱり記録を残せるように、きちっと記録する人間がおるのがいちばん大事ですし、できればビデオとかテープレコーダーで録っておくというのは非常に大事です。人に説明できませんので。

避難準備情報の発表について

【市島支所長】 やっぱり避難情報は夜間でも出さないとあきませんね、絶対に。危ないということを伝える必要があると思うので。それは最大限に続けていつてもらいたいと思います。なんせ、安全確保してもらうことが第一ですので、危ない状態ですというのは伝える必要があると思います。

【本部員 A】 具体的に言わないとあかんね。

【市島支所長】 躊躇させるというのがあかんと思う。

【本部員 A】 避難準備情報のタイミングというのはこれがなかなか難しい。必ずどんな事態において避難準備が出せるかって言ったら…。

市民の方から言えば、「避難」という言葉を付けて市が放送すると、それが「勧告」であっても「指示」であっても一緒に、あまりその違いを理解されている方は少ないと思います。

だから、避難準備情報の発令放送だったら「避難の準備をしてください、逃げ遅れる可能性の高い要配慮者はこれが避難のタイミングですよ」と。でも「避難」という言葉が出てしまうと、おそらく一緒なのでしょうね。

気象庁だって、集中豪雨の場合は、府県単位に広がりがなく特定するところだけだったら特別警報は出せないでしょうし…。

実際この経過書類を見ていただければわかるように、気象台も「ここまでとは予想できなかった」と言われています。気象台が言われていることは絶対だろうと思って、本部会議などで気象台からのコメントを話してきました。

これから、避難準備情報の運用と、避難勧告を躊躇なく、ある程度避難勧告を出す地域をあらかじめ特定しておいて、その基準に至ったら即その地域に対して出してしまえというのが、本当にそれでよいのかどうか疑問に思うこともある。

避難勧告を百回出して一回当たればたらそれで良いと言う専門家の話もありますが、市民の方は狼少年的な感覚になりますし…。当然、去年の災害以降、現地本部（被災地域内に設置）の本部長判断で避難勧告を多発していたこともありましたが、やはり、被災地の住民は避難勧告がまた出たという感覚でしかありませんでした。

当時、いつ崩れるかわからない状況があったので、できるだけひどい雨じゃなくても、時間 20 ミリ程度の固まった雨が被災地に降るという予測でもって避難勧告が出していた状況がありました。結果的に百回中一回当たれば良いという判断が本当によいのかどうか、そのあたりの判断は難しい。これから特に、そう思いますけどね。

【市島支所長】 勧告やなしに指示を出すということになるかもしれないね。感覚として、やっぱり自分で判断されるんで、避難勧告の信用性がだんだん薄れていったら、今度は指示を出さないと、となるかもしれませんね。あまり空振りを続けると、勧告の意味合いがちょっと薄れてくるかなと心配してます。

【本部員 B】 丹波市は、何年か前には避難準備情報とか出して、全然雨が降らへんで、笑いものにされて報道されたことがあるんです。そういうイメージから行くと今は逆に、早めに出して良かったねとか、フェイスブックだとかに情報があがっているんです。けどやっぱりこっちは出したら楽なんですけれど、自己満足しとるだけであって、ほんまの信ぴょう性を問われたら非常に怖い。

災害発生後の対応

【本部員 B】 また、災害が発生して、その以降にも雨が結構降って、注意報とか警報とか出ましたので、避難勧告を出したんですけど、災害の復旧をしている現場から言わせると、それならボランティア来てもらっている者は引き揚げてもらわないかんとか、作業員も重機

も引き揚げなとか。まあ言うたら早よ解除してくれと言われるんやね。ここにおる人間からすると、雨降って危ない可能性があるさかいに逃げろと言わないといけないうが、現場は作業を進めたいんで解除してくれと。このギャップがありました。そういう意味では、浸水被害で水が引いたら終わりではない。非常にこの土砂災害は、後を引くのが怖いです。

緊急避難場所について

【市島支所長】 今回は、われわれにはリードタイムがあると思ったんです。避難所開けて、外へ移動してもらう時間があると思った。ただ降り方が 15 分ごとに変わって行って、これは、支所が直接出した方がよかったかなという反省はあります。もっと避難所に行ってもらえる人が増えたかもしれません。結局避難所に逃げても浸水したんで、同じことだったかもしれません。

ただ避難所は頑丈なところで、2 階に上がれば済むことなので、浸水していようがそこに入れるんやったら利用したほうがいいなあと思いました。そこに土砂災害が来たとして、たぶん流されることはない。そこに入っておられる方は、命は守れるはずやなど。当初浸水したらあかんなあという感覚でおったんですけど、考えが改まってきました。

【本部員 A】 それをいうと、今、国が緊急避難場所を指定せよと言っていますが、それをしようとする、このような中山間地域に位置する丹波市のようなところは、浸水想定区域の中だったり、もしくは土砂災害警戒区域の中にある避難所であったりと、それを除外して指定しようとする、ほとんどの公共施設は指定できなくなってしまいます。

また、避難所の一部まで土砂災害警戒区域がかかっているところもけっこう多くて、そうなるとうちに避難すればいいの、という話になってします。

丹波市は、昨年の豪雨災害の影響もあり、現在まで緊急避難場所等の指定見直しができなくて、今後近いうちに指定までは進めないといけないうですけど、浸水想定区域の中にある小学校であったとしても、2 階は使えるということで指定するかと…。耐震基準を充たしている堅牢な建物ばかりなので…。やはりそういう判断も行っていないと避難所はないんですよ。

ただし、それをするためには、早めの避難しかないんですが…。今の間だったら避難できるという判断を早めにして、避難したら、ある一定時刻から以降は、水平避難は一切だめという形じゃないと…。

以上